

大阪希望館「住まいをなくした人の再出発支援センター」

平成21年度 事業報告

職と住まいを失って、ホームレス状態に至らざるをえなくなった不安定就労の若者たちの医療、精神、就労、住居、生活面での支えとなり、社会復帰をはたすとともに地域への定着化をめざして、総合的にサポートする目的で設立された大阪希望館も、昨年6月の開設以来1年が過ぎ、当初4室でスタートした支援居室も現在12室に拡大し、今日迄27人の方を受け入れることができました。

(1)入居時の状況

* 年齢

20代	30代	40代	60代
8名	9名	9名	1名

60代の方は、(希望館の入所者は20～40代前半くらいの人を対象としているが、支援の方向が決定しており、諸々の状況から特例として期間限定10日間の支援をしたもの)

* 学歴

中学卒業	高校中退	高校卒業	専門学校	大学卒業
1名	7名	16名	1名	2名

* 直前職

派遣	非正規	正社員	建設日雇	自営業	その他
14	7名	2名	2名	1名	1名

派遣には、登録型日払い派遣含む

(2)入居後の状況

* 入居中に職業訓練及び資格を取得した人

パソコン基礎科(基金訓練)	2名
介護ヘルパー2級	1名
刈払機、チェーンソー	1名
玉かけ、フォークリフト、小型移動式クレーン	2名
普通免許	3名

* 就労関係

就職決定	8名	(内訳)社員として就職	4名
		製造工場へパートとして就職	1名
		住み込みで就職	3名
雇用創出基金事業への就職	5名		
住吉住之江公園就労体験	7名		

* 住民票設定後、雇用保険を受給できた人 4名

* 入居期間 卒業者 18名 最短2日間～最長6カ月（平均3カ月）

(3)退居時の状況（上記卒業者18名の内容）

* 就職後、居宅契約退所（5名）

* 就職（住込み）退所（3名）

* 無断退所（2名）

* 自主退所（2名） 退所後、NPO 釜ヶ崎支援機構で継続支援をおこなった

* 急病逝去退所（1名）

* 救護施設入所（1名）

* NPO 釜ヶ崎福祉部門へ引き継ぎ（1名）

* 生活保護申請、居宅契約退所（3名）

居宅を構えて退居された方達は、個々の状況に合わせて週1回～月に1回は希望館の事務所へ状況報告に来てもらっている。（支援及び相談関係の継続）

(4)現在の入居者の状況

* 職業訓練受講中 1名（雇用保険を受給しながら介護ヘルパー2級受講中）

* 基金訓練受講中 1名（セールスマネージメント販売士養成科受講中）

* 正社員として勤務中 1名

* 雇用創出基金事業就職 3名

* 住吉公園就労体験参加中 1名

* 今後の方向性を相談中 2名

希望館の役割と今後

希望館に入居してくる人達は疲れ果ててやってくる、さらに、これからどうなるのか、何をすればいいのか、宿所はどんな所なのか、どんな人がいるのか等の不安を抱え所持金も無い状態で、なかには極度の緊張と空腹状態である人もいたため、まず食事（と云っても非常食とカップ麺程度だが）をして落ち着いてもらい、簡単な聞き取りと約束事にサインをもらったうえで居室に案内（民間借り上げのアパートで個室）シャワーを済ました後休んでもらう、大多数の人は2～3日後には緊張が解け落ち着いてくる、その後個々の状態を判断したうえで詳細にわたっての相談を開始している。

入居と同時に健康状態を把握するため健康診断を受診してもらい、合わせて専門家による職業カウンセリングを最低2回受講、そして生活リズムと就労意欲を維持しかつ生活費にあてる目的で、就労意欲継続訓練事業（淀川河川敷清掃）に週3回参加、それ以外の日には朝9時に事務所へ来所、相談や対話を重ねるなかで相談者の希望、目的に合った最善の方法を検討、次のステップに進むまで1カ月くらいかかる、目処が付き退居するま

で個人の状況にもよるが、3ヶ月～6ヶ月を要する。

希望館のスタッフは常に家族代わりになって、また入居者全員がファミリーのように接することを心掛けている。聴く、話す、と云う対話の中で時にはカミナリを落とすこともある、入所者とより密接な関係を築くため、また卒業者と入所中の人達との交流を深めるため、月に1度希望館の集いを開催している。集いではOBから「あせって勢いで探すのはあかんで、自分のスキルにあった仕事でないと長続きせん」「スタッフに相談しにくい事や、入所者仲間に話しにくい事があつたらいつでも相談してな」など支えあう関係もできつつあります。しかし他方では残念ながら無断退居した人や、急病で逝去された悲しい出来事もありました。

開設して1年、支援とは根気の連続である、支える方も支えられる側も、その糸が切れた時に支援は終わる、課題はまだ山積していますが、希望館の目指す「誰も使い捨てにされない、誰もホームレスにされない社会の実現」に向かって、投じた一石の波紋が幾重にも広げられるよう、各部門と連携をとりながら情報交換と知恵を拝借し、関係機関の協力を仰ぎながら、勉強を重ねて相談者の支援のカジ取りを誤らぬよう取り組んでまいります。

担当 分林 康次